

鳩木節子の後日  
甘木数彦

第二章

三

それはヨ号組織との戦いも終わりが近付いていたときのこと。ある深夜、節子は独り公園にいた。暮らしているマンションからはあまり離れていない。

野良犬が一匹、節子に向かい合っている。潤んでいるように見える街灯が、強い光を周縁から投げかけていた。節子と犬の影が長々と、地を這っている。

その犬は雑種だった。なにか大型犬の血を引いているらしいが、どういう犬の組み合わせなのかは判らない。黒くて長い毛を生やした、おとなしい犬だった。

当時の節子にとってその犬は一番の友人であり、一緒にいて気持ちを弛めていられる唯一の相手だった。節子はその犬にノブミツという名前を付けていた。組織にさらわれたとき殺された、弟の名前だ。

そのとき節子は変身していた。当然の事ながら、ノブミツの前でその姿になっているのは初めてだ。

「じゃあ、本当にあなたが」

「ああ。君たちがヨ号組織と呼んでいるものの首領だ」

ノブミツはうなずく。その声は酷くかすれており、ところどころ吠え声と区別しにくいところがあった。

これは夢だ。節子は思う。しかし目は覚めないし夢らしいところの一つもない。すべて起こった出来事だ。寝ているあいだにまた厭な記憶が再生されている。

「嘘」

「いいや。もし嘘ならどうして、ボクがこうやって人間のように喋るんだろう？」

そのときノブミツが本当に困惑していることが、なぜだか節子には解った。

「いつだったかキミは話してくれたね。組織の首領というのはいつだって、秩序を守るために戦う者のもっとも身近な存在だって」

そのことを節子に話してくれたのは伊助だった。それを節子はノブミツに語ったのだ。それだけではない。節子は色々なことを、ノブミツを介して自分自身に語っていた。

「それならどうして、私を殺さなかったの？ そんなチャンスはいくらでもあったでしょ」ノブミツは首を振った。

「ボクはこうやって人間のように考え、喋れる以外はただの犬と変わらない。人間にしても、たぶんそれほど頭がいいわけじゃない」

「それで、首領だなんて」

「どうしてだろうね。よく解らない。とにかく気が付いたときにはもうそうだったんだ。ひょっとしたらボクが首領である理由は、キミにとって一番心を許せる存在になることになっていたからかもしれない」

なることになっていた、というのが節子にはよく理解できなかった。ヨ号組織が活動を開始したのは、節子が小学生のころのことだ。もちろんその当時、節子はノブミツと出会っていなかった。そもそも犬の寿命からして、当時ノブミツは生まれていなかったのではな

いだろうか。

ノブミツも自分で言ったことがおかしかったのか、少し顔つきをやわらげた。

「もうそれも終わりだ。キミはボクを倒さなくちゃいけないんだろ？ ヨ号組織の首領抹殺と壊滅というのは、そういうことだ。そしてボクはキミに抵抗する力を持っていない」ノブミツは地面に背中を付けて前脚をすくませ、腹を見せた。顔だけ持ち上げて節子を見遣る。

どちらも動かず、何も言わない。時間がばかりが動く。先に沈黙に絶えられなくなったのは節子の方だった。

「尋問、しなきゃ」少しでも先延ばしにしたい一心で、節子は言った。「いったい何が目的なの？」

「さあ。それは一番最初の首領。君たちがイ号組織と名付けた集団の首領に聞かないと」言うとノブミツは自分の顔をなめた。節子は続きを待つ。

「口号組織以降は、言ってみればイ号組織の首領が死ぬ前に企てた遠大な呪いなんだよ。どういう仕組みか、滅ぼされてもやがて新たな組織が生まれる。そして目論見が成功するまで何度でも、それは繰り返される。ただし、当初の目的はもう失われてしまって誰も知らない。どこかの時点でどれかの組織が知らずにそれを達成したとき、初めて目的が何だったのかは解るんだ。最初の首領は自分の死後もなお動き続けるプログラムを作り上げ、実行したと言い換えてもいい。ヨ号組織を滅ぼしてもプログラムが停止されない限り、そのうちタ号組織が生まれるんだ。ボクらはみんな、完成予想図のない設計図に従って複雑な機械をこしらえているようなもの。どうなれば完成で、それがどういう働きをするのかは判らないんだ」

仰向けで喋るのは苦しいらしく、ノブミツは節子の方を向いて腹這いになった。

「じゃあ、何をどうするかは全て決まってるってこと？」

「いいや。設計図はただの例え。実際にそう呼べるようなものはない。そもそもボクらは本当の意味での組織でさえない。偶然にしか思えない経緯で、個々がゆるやかにつながりながら活動しているだけだよ。キミやキミの先輩達が抹殺した構成員のほとんどは、自分が何かに所属していたなんて思ってなかったらうね」

節子は腕を大きく振るった。鉤爪が空を切る。バカにされている気がして、苛立ったのだ。

「でも私をさらい、家族を殺した奴らは」

「そりゃ、小グループだってあるさ。彼らは自分たちがもっと大きな組織の一部だとは思ってなかった。そもそも構成員には人間なんてほとんどいないけど、キミ同様の改造人間ばかりというわけでもないんだ」

スクーターが公園の横を通り過ぎた。一人と一匹は音が近付き、遠ざかるのを待つ。

「さ、そろそろいいだろ？ こうやって喋るのも、意外と辛いんだ。ノドの構造とかね」

ノブミツはまた、自分の顔をなめた。そのまま舌を垂らし、あえいでいる。

「無理。できないよそんなの。あなたは、生け捕りにする」

その場その場で口にする言葉の先へ、思考が回らない。

「それでボクはどこか遠くへ隔離されて、拷問まがいの実験材料としていつまでも暮らすのかな？」

節子は答えられなかった。

「ねえ。キミにはけっきょく、ボクをここで見逃すことなんてできないだろ？ 使命と復讐、そのためにキミはこれまで人生を投げ捨てて戦ってきた。それを無駄にするなんて、できないだろ？ 今まであれこれ聞かせてくれた想いは、犬一匹のために捨てられるようなものじゃないだろ？ ボクのことは気にしなくていい。この場で助かったところで、なにがどうなんだか、もうさっぱりでさ。いままで話したことだって、部下の話をもとめたものでしかないし。ボクの頭には難しすぎて、手持ちの情報から何かを考えるなんて無理なんだよ」

そう口にするノブミツは、やけにサッパリとしていた。もうノブミツ自身の中で、この件は終わっているのだろう。だからこの余白としての時間が、なんの憂いも不安もないものとして存在しているのだ。

そうしてけっきょく、節子はノブミツを殺した。心臓を一突き。呆気なかった。血まみれの死骸を抱いて、変身したまま節子はマンションへ帰った。節子の腹部から足の先まで流れるノブミツの血は、少しも暖かくなんて感じられなかった。

目覚めると節子は泣いていた。ノブミツを殺したあのとき、流せなかった涙だ。節子は布団に入ったまま身を起こす。

ノブミツを殺したときの夢を見ると、一日を始める気がしない。夢で見た日の翌日から、節子はしばらく呆然として暮らしていた。今だってまだ、その後遺症から抜け切れていない。時間と共に解消されるだろうと医者は言っていたが、節子にとってそれは役に立たない見通しだった。

どこからか猫の鳴き声がした。マンションに出入りしていた野良猫のことを思い出す。ノブミツのことがあったから節子は猫に名前を付けず、可愛がりすぎないようにしていた。今となっては正解だった気がする。

化け猫の噂は増える一方だった。ただヨ号組織と戦っていた当時に比べて、そのペースはゆっくりとしていた。特に封じ込めようとしていないのに、商店街の外へ広がったりもしていない。

最初のうちはその理由に気付かなかったが、よく考えてみれば簡単なことだった。これまでと違って、今回のうわさ話は常に目撃者が誰なのか、はっきりしていた。誰もが誰もと知り合いなのだから、無理もない。

これなら「兄の友達」や「知り合い」などよりずっとバリエーションは増殖しにくい。これはもう、噂というより商店街を襲う怪現象といった方が正しいのかもしれない。

それにこの商店会の人、同じ商店会の人か出入りの業者以外と親しく話す機会が多くないので、伝播も遅い。そもそも商店街のイメージを悪くするような話など、外部へ積極的に広めたい人間はいない。

噂の流通が主に大人たちというのもあるだろう。商店会の人で、高校生以下の子供がいる人は少ない。居たとしても、子供と親は互いに自分の知らないところで相手がどんな雑談をしているのか、案外知らないものだ。

こうして考えてみると、化け猫のうわさ話は今までヨ号組織が係わってきたものとは振る舞いが違う。おかげで節子は未だに、それがヨ号組織の活動と同じ現象なのかどうか確信が持てなかった。

バリエーションの増殖と伝播のスピードがゆっくりしていると言っても、それは放っておけば数週間で全国民に伝播し、数千のバリエーションが生まれるほどの速度に比べればの話であり、狭い町内ながらも化け猫を見たという人は着実に増えていた。

携帯電話が鳴った。起きあがった節子はディスプレイを見て慌てる。電話は香奈からだった。今日が出勤日であることをすっかり忘れていたのだ。意識が体の中に、しっかりと固定されるように感じられた。節子は電話口でさんざん謝ると、急いで支度をして店へ向かった。

到着したときには、すでに開店時間を一時間ほども過ぎていた。節子は香奈からひととおり注意を受けると、午前中いっぱい三階で梱包や発送作業に取りかかった。

午後になった。午後はたいてい、レジ番をして過ごす。香奈は店内の手入れをしたり、どこかへ買い付けに行ったり、二階のギャラリーへ展示する仮面のことで打ち合わせに出かけたりする。今日も香奈は打ち合わせのため、出かけていった。

客はほとんど来ない。たまに来て、商品知識がまだない節子一人では最低限の対応しかできなかった。他の時間はネットショップの注文状況を確認したり、三階から持ってきた仮面関係の書籍やカタログを読んで過ごしていた。もともと読書が好きな節子にとって、これまで読んだこともないそうした本は面白く感じられ、没頭しているあいだは憂鬱さも忘れられた。

暇なときはときどきネットショップのブログに記事を書くように言われてもいた。書き方を教わったのでたまに本を読んでいて思ったことなどを書きもしたが、そんなものを読んで面白いと思う人がいるのか節子には自信がなかった。そもそも、ちゃんとした文章の体裁を成しているのかも不安だ。だから、ちょっとしたことを書こうとするだけで、ときには一時間ほどもかかってしまう。

香奈の話によれば内気で控えめな節子の記事は「けっこう人気」で「ネットでもちょっと話題」なのだそう。そう言われても節子には実感が湧かなかったが、とりあえず香奈が満足してくれているならいいと思うことにした。

香奈が作った丁寧な説明書を見ながら、節子はネットショップの商品ページを更新していた。どこか変なところをいじってダメにしてしまわないか緊張しながらの作業なので、時間がかかるし疲れる。香奈は心配のしすぎだと言うが、それでも用心することにしている。

ドアの開く音がした。顔を上げると香奈だった。コンビニの袋を手に提げている。

「おかえりなさい」

「ああ、うん。ただいま」

なにかトラブルでもあったのか、香奈は沈んだ様子でそう言うと、袋からカップに入ったカフェラテを二つ取り出し、レジの横に置いた。それから店の隅にあるスツールを持ってきて、節子の向かいに腰を下ろす。

「それ、お土産。飲んでいいよ」

香奈はカフェラテを指さす。節子は「どうもです」と曖昧に呟き、ひとつ手に取った。香奈はしばらく、難しい顔をして黙っていた。何度か節子の方を見る。

勧められたのだから飲まないのも悪いと思い、節子はカフェラテを飲んでいただけ、どうも落ち着かない。しかし香奈に何があったのか尋ねるのも、それはそれで気が引けた。

この場合、質問した方がいいのか悪いのか。間違っただけの選択をして香奈の気分を害したくはなかった。

節子が煩悶していると、香奈が先に口を開いた。

「化けネコ、私も見た、かも」

節子がどう応えようかと迷っていると、香奈は話を続けた。

「それ買おうと思って、帰りにそこのコンビニに行ったんだけど。パン屋の隣にあるヤツね。あそこの店長やってる幸弘ってのは私とタメで、酒屋だったのをあいつがコンビニにしたんだけどまあそれはいいとして。でさ、あいつが化けネコ見たんだって？ とか言うわけ。で私もそうそうなんて言って話をしてお店を出たんだけど……。私、化けネコを見たなんてあなたに言ってたっけ？」

「いえ、私には何も」

「だよ。それって、おかしくない？」

そこでやっと香奈はカフェラテを手にとると、自分でも飲みだした。

「見たんですよね」

「見た記憶はある」

香奈の話によると一昨日の夜中、コンビニで夜食を買った帰りに、マンション近くで遭遇したという。

その化け猫は体の両脇に何本もの脚が生えたキジ猫で、ムカデのように両脚をくねらせて歩いてた。急に立ち止まってはまた動き出す動作もどことなく虫を思わせた。

猫は香奈に気付くと、ゆっくりと近付いてきた。近付いてみると、猫の瞳孔は左右反対側を向いていたらしい。

気味が悪くなった香奈は猫を十分に引きつけておいてから一気にその上を飛び越し、振り返らずにマンションの自室へ走り込んだということだった。

「昨日は節子ちゃん出勤日じゃなかったからしょうがないけど、普通そんなことあったら今日の午前中でも話したよね。お昼だって一緒だったわけだし。おかしいでしょ？」

節子は同意する。

「それにさ、記憶はあるんだけどなんか変な感じなんだよね。記憶だけがあるっていうか」

「本当は体験してないのに、その記憶だけあるような感じですか？」

「そうそう。本当は夢で見たことが、実体験の記憶の方に紛れ込んでるような。だいいち、コンビニであいつに言われるまではそんな記憶、なかった気もするし」

「それって、誰から聞いたんでしょうね？」

「うーん。ちょっと待って」

香奈は言うなり携帯電話を取り出して電話を掛け、出た相手と短い遣り取りをかわした。

「美鈴さんだって」言いながらまた電話を掛ける。「あ、美鈴さん？ ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

聞き取りの結果、美鈴は香奈から昨日、直接その話を聞いたということだった。パン屋を営む美鈴の店へ、香奈が昼食を買いに来たときのことだった。

「憶えてます？」

節子の問いに、香奈はためらいつつうなずく。

「確かに美鈴さんに話した記憶はある。言われてみるとね。でも」

「それも記憶だけ、という感じですか？」

「うん」

二人とも考え込んでいると、珍しく客がやってきた。香奈は不自然に見えない程度の素早さで立ち上がると、客に笑顔を向けた。

その日の夜、節子はまた伊助の部屋に来ていた。伊助は前に会ったときと同じ服を着ていたが、不潔な印象を受けなかった。どういうわけか伊助は代謝が極めて不活発で食事あまり必要としないし、喋るとき以外は呼吸もきわめてゆっくりしていた。

節子は香奈の出来事を伊助に語った。

「それじゃあまるで、いや、まあいいや」

「なんですか？」

何かを言いかけて面倒になったらしい伊助へ、節子は言いつのる。

「いやさ、節子の話だとまるで姉さんの過去が遡って作り替えられたみたいだな、と。他人の指摘を通してね。本人に身に覚えのない記憶だけがあるってのはそんな感じがする。もしこれがヨ号組織と関係しているんなら、大発見なんだろうなあ。なにせ組織が展開するうわさ話ってのはどうして生まれて、どうして変異したり急に伝播するのか判ってないから。情報技学とかもっともらしい名前はあってもさ。ひょっとしたら商店会の他の人も、みんな姉さんと同じような感じなのかもな。それならまだ現実化していない化けネコを見たって人が多いのも理解できる。今回のケースを分析すれば何かヒントにとかなんとかかんとか」やはり話している途中で面倒になったようだった。「気になるなら、姉さんに相談したらどうだ？」

「またそうやって、面倒なことを他人に押しつけるんですか？」

「いや相談するなら、やる気がないヤツより、やる気があるヤツの方がいいだろ。姉さんはただのお面屋じゃない。ああ見えて頼りになる」

「頼りになるって、あの人いったい」

「俺から勝手には言えないだろ。本人に訊け」

そう言われると、節子はそれ以上なにも言えなかった。いつも伊助は面倒臭さを正論で正当化する。

けっきょくまた様子を見ようということになって、節子は伊助の部屋を後にした。

提供：ハムカツ屋

<http://www.hamkatsuya.com/>